

0歳～100歳までの在宅医療と地域連携を考える専門雑誌

0100 在宅新療

THE JAPANESE JOURNAL OF HOME CARE MEDICINE FOR ALL AGES

2016
8
Vol. 1 No. 8

特集 地域という “個性”と 在宅医療



連載

診療報酬から読み解く 医療政策の描く未来像
高齢者医療を考える “フレイル” について知ろう
認知症の人との向き “愛” 方 看取りまで寄り添う認知症支援
care well cafe 秋山正子さんに聞く

へるす出版

へるす出版

「在宅医療」領域の専門雑誌

在宅新療 0100

0歳から100歳まですべての方の、
生活の場での日々の暮らしを支える医療、看護、ケア、
さらに地域包括ケアシステムと多職種連携までを考えます。



2016年1月創刊

毎月
20日
発売!!

定期購読が
断然お得!!

本体価格2,100円+税×12ヶ月
=25,200円+税

年間購読特別料金
=24,000円+税

定期購読のお申し込み・詳しい情報は弊社HPまで!!

<http://www.herusu-shuppan.co.jp>

〒164-0001 東京都中野区中野 2-2-3
TEL 03-3384-8035 FAX 03-3380-8645

Printed in Japan ©

定価(本体価格2,100円+税)

配送料(100円+税)

雑誌 14081-08



4910140810864
02100

私の在宅履歴書

縁あって始めました

ザイタク医療とは何か。こちらから出かけて行く医療のこと。どこに？ 相手の家に。

医療法人社団裕和会 長尾クリニック院長

長尾和宏 Nago Kazuhiko

幸か不幸か私は生来誰かの家に行くことに抵抗がない、要は貧乏な家に育ちました。中学校時代は新聞の配達と集金でクラスメイトの家々を回っていました。高校時代は郵便配達など配達のアルバイトに従事。いったん社会人になり、後に入った大学では入学式当日に無医地区研究会に入会し、六年間長野県の山の中にある人口八百人の村に通いました。その村には独居の高齢者や認知症の人が多く、野沢菜にしょうゆをかけてような著明な高血圧と寄生虫(回虫)とい

う課題がありました。そこで減塩指導と駆虫薬を配りながら一軒一軒「家庭訪問」をしていました。一方東京では、母子家庭で送りゼロの身だったので常に数人の家庭教師先をもち、土曜日などは深夜まで四、五件くらいの家々を回っていました。中高生として大学時代もずっと他人の家の訪問ばかりだったので、人の家に行くことに抵抗がないというか、行くことが当たり前前の青春時代を送りました。

は人の家に行くことがなく、とても窮屈に感じました。卒後十一年目の勤務医のある日、抗がん剤治療中の患者から「抗がん剤をやめて家に帰り、先生に往診してほしい」と懇願されました。上司に相談しましたが病院から家への往診はできないとのこと。バカ正直にそう告げた夜、その人は病院の屋上から飛び降りました。深夜、さっきまで話していた人を上司の指示で病理解剖しながら、自分がこの人を殺したことを深く悔やみました。そこに阪神・淡路大震災が起きて大きなストレスが襲いました。さまざまな出来事も重なり、三カ月後には病院を去り勤務医生活に終止符を打つことにしました。一九九五(平成七)年のことです。

二つ隣の町の商店街の一角にある雑居ビルの二階のとても狭い場所で開業しました。しかし患者はほとんど来ませんし、往診依頼もありません。あれほど忙しかった勤務医生活が嘘のように静かです。うつ病になりそうでした。患者がいなかったため看護師は不要で、私と事務員さんだけの世界。唯一、肝炎と肝臓がんで治療中であつたビルの大家さんが毎日、強ミノ(強力ネオミノファアゲンシー)®の注射に来院してくれました。去られたら困るからだったのでしようか。しか

し頼みの綱(?)だったその大家さんもついに腹水と黄疸が強くなり、数百メートルの距離を歩くことができなくなりました。

「先生、家に来てくれへんか」。暇だったので、出勤途中に立ち寄りアミノレバン®二百ミリリットルを点滴しながらいろいろな話をしていました。自宅なので大量の点滴も輸血もせず自然な経過に任せていたら二カ月後、その人は静かに旅立たれました。何百人も診てきた肝硬変症でしたが一滴も血が出ない旅立ちは初めてでした。そしてその人が、私が十数年後に何冊かの本を書くことになった「平穏死」第一号となりました。勤務医として千人以上の最期を看取ってきましたが、平穏死の経験は初めてでした。そして自分にとって在宅看取り第一号でもありました。

「往診を受けて自宅で最期を迎えた」。その噂は商店街を駆け巡ったようで、さっそく新たな依頼が舞い込みました。第二号患者は胃がんの終末期の八十代男性でした。年末年始を病院から外泊で戻ってきたとのこと。大晦日も元旦も往診をする旨を告げると、さっそく退院の手続きをしてきたので、鼻からの管を抜き口から食べさせました。お屠蘇を美味しく飲む、おせち料理を少しつまみました。その人も自然に任

せていたら一カ月後に特に痛みもなく旅立ちました。一九九五年当時は、訪問診療という言葉はなく「往診」しか使いませんでした。また介護保険もなく訪問看護師も知りませんでした。とにかく暇だったので、たった一人の在宅患者をたった一人で毎日往診していました。

それから二十一年が経過し、気がつけば約千人の人を自宅で看取り、「平穏死」と題した本を数冊書く身になっていました。現在は六人の常勤医と二十五人の看護師など百人を超えるスタッフとともに、年中無休の外来診療と四百人の在宅患者をかかえる身になりました。十三年前に近距離移転して箱は大きくなりましたが、在宅医療の原

型は開業当初と比べると変わらないうつもりです。今思えば、現在よりのとかな時代に開業して自然と在宅の世界に入っていました。特に研修を受けたわけでもなく、子どものときから気軽に人の家に行く、困った人がいたらこちらから行くという生活が、五八歳になっても続いているだけです。

近年、在宅医療がなんだか特殊なものになり、また規則も年々複雑になる一方なのが残念です。また介護保険と医療保険の連携が不十分なことが気になります。ザイタクはもっと自然にやり、楽しみたいもの。しかし後進の指導もあるのもう少しがんばりたいと思います。

著書

- 認知症は歩くだけで良くなる(山と溪谷社)
- 親の「老い」を受け入れる(ブックマン社)
- 高齢者の望む平穏死を支える医療と看護(メディカ出版)
- その医者のかかり方は損です(青春出版社)
- 寝たきりにならず、自宅で「平穏死」(SB新書)

病院でも家でも満足して大往生する101のコツ(朝日新聞出版社)

「大病院信仰」とここまで続けますか(主婦の友社)

「平穏死」10の条件(ブックマン社) など



イラスト：岡村慎一郎